

「彼女に会いたい！」

今井
野々子

男子高校生の突っかけ上履きの足音、カセットテープなどの塔が倒れる音。

伊藤良平（18） 「大丈夫か、大祐！」

鈴木大祐（18） 「もうやだ！ 暑い！ 高3の夏休みにさ、俺たち一体何やってるわけ？ 良平も思わない？」

良平 「仕方ないだろ、放送局員がなくて、俺たちは生徒会長と副会長なんだから」

大祐 「そうだけど、暑すぎて死にそうだよ」

良平 「放送室は目張りして締め切ってるからな」

大祐 「これのせいかな！」

びつ、とガムテープを剥がす音。

良平 「やめるよ、大祐」

大祐 「いいじゃん、もう使わないんだし」

びりびりとガムテープを完全に剥がす音。その後、窓が開く音と同時に、外からの蝉の鳴き声。

大祐 「夏だな、知ってたけど」

良平 「うん、夏だ」

大祐 「そして結局は暑い！」

遠くで学校のチャイムが鳴る。

タイトル「彼女に会いたい！」

学校のチャイム（タイトル前からの継続、徐々に大きくなる）

大祐 「良平、そろそろ帰るべ」

良平 「うん」

大祐 「ここにあるのは全部、開校以来百年の積み重ねでしょ。俺らで処分とか無理！」

金属バットの快音、数人の歓声など。

良平 「野球部か？」

大祐 「同好会だろ。人数が足りなくて、どの部も大会に出られなかったじゃないか」

良平 「俺たち外れ引いたよな、高校生活」

大祐 「本当だよ…高校最後の夏、楽しい思い出の一つも欲しいのに」

良平 「この高校の、最後の卒業生になれるってだけでもんな」

大祐 「大変なことばかりだ」

テープなどをかき集める音。

大祐 「おっ」

良平 「どうした？」

大祐 「テープレコーダー。聴けるのかな？」

良平 「へえ、初めて見た。小さいな」

大祐 「中にカセットが入ってる！」

カセットレコーダーからテープを取り

出す音。

大祐 「何々…1988年8月。二十五年前か」

良平 「再生出来そう？」

カセットをレコーダーに戻し、再生ボタンを押す音。動かない。

大祐 「駄目だ…電池が古い」

良平 「単三電池なんて無いよな」

大祐 「うん」

時計の針の進む音、徐々に大きくなる。

良平・大祐 「あった！」

時計の針の進む音、時計の裏ふたを開け、電池を取り出す音がした瞬間に止まる。

少しの間

レコーダーの再生ボタンを押す音。カセットの回る音。

大祐 「よっしゃ！ 動いたぞ！」

※テープの音声※（テープを聞きながら良平たちが会話しているので、テープと会話交互に）

放送局員A 「イチゴ先輩主演『ラジオドラマ

夜の観覧車」

イチゴ「高校三年の夏休み、わたしは彼と遊園地に忍び込みました」

※テープの音声F O ※

大祐「何コレ？」

良平「何だろうな、でもこの声…」

※テープの音声※

放送局員B「プレゼントがあるんだ」

イチゴ「ありがとう、何かしら？」

放送局員B「開けてみて」

紙包みを開ける音。

イチゴ「これは…」

放送局員B「僕のことをずっと忘れないで欲しい」

い

イチゴ「忘れないし、ずっと一緒よ」

※テープの音声F O ※

大祐「無理、聴いてられない！何コレ！何なのコレ！？」

良平「止めるなよ、最後まで聞こう」

大祐「だって…うわ、鳥肌が！」

良平「すぐ終わるみたいだしさ」

大祐「何、良平的にはこれ面白いの？」

良平「面白くはないけど…でもこの女子の声は

良いだろ」

大祐「そうかあ？」

※テープの音声※

(ラジオドラマは終了している)

放送局員A「イチゴ先輩が、卒業を待たず函館に転校してしまうなんて、まだ信じられませ

ん。札幌に来ることがあったら絶対に部室に来てくださいね。放送局員一同お待ちしてま

す。それでは局員一人ずつ、イチゴ先輩に一言…」

数人の声が入れ替わりイチゴ先輩へのメッセージを述べる。

※テープの音声F O 終了※

良平「イチゴ先輩って？」

大祐「ドラマの女の方だろ、多分」

良平「転校するイチゴ先輩へのメッセージテープが、何でここにあるんだ？」

大祐「さあ…」

良平「これは届けるべきだろ？」

大祐「気持ちはわかるけど…」

良平「大祐も言ってただろ！掃除で夏休み終

わりたくないって！」

大祐「そうだけだよ」

良平「行こう！函館に」

大祐「わかったよ、良平。とりあえず今日は帰

ろう、ほら、野球部のやつらみんな帰った

よ」

学校のチャイムの音。

二人の歩く音。

大祐「それにしてもなあ…何もわからないんじゃないかな」

良平「ああ」

大祐「岡村先生も三月までは放送局の顧問だったのに、何だか無責任な言い方だった」

岡村幸子(35)「イチゴ先輩なんて知らないわ、当時まだ十歳だし。あ、でも当時の記録

では夏休み中、函館に転校した生徒は一人だけよ…名前は豊田葉、転校先の高校は…」

大祐「本来、岡村先生も手伝うべきじゃない？放送室の片付けも、テープの件も」

良平「まあ、名前も転校先も教えてくれたし、明日の片付けも免除してもらえたし」

大祐「良平…」

良平「ん？」

大祐「イチゴ先輩の声、凄く好きみたいだけどさ。あれ、二十五年前だからな」

良平「イ、イチゴ先輩に会いに行くわけじゃないだろ！」

大祐「なら良いけど、がっかりするなよ。あとホテルの予約はどうしようか？」

良平「やつとくよ」

大祐「ありがとう。それから、本当に大丈夫な

大祐「ありがとう。それから、本当に大丈夫な

の？」

良平「何が？」

大祐「何がって、親」

良平「ああ…大丈夫だよ」

大祐「本当に？ 俺はもう母さんからOKのメ
ールもらったけど、お前のおじさんとよ
く喧嘩してるだろ？」

良平「自分の金で行くんだし、何日もいないわ
けじゃないし平気だろ。まあ、何日になくっ
ても気にしないだろうけどさ」

大祐「お前さあ…もう少し大人になれよな」

少しの間

良平「父さん、遅いな…」

玄関の扉の開閉音。

伊藤勇平（43）「ただいま」

良平「おかえり」

勇平「珍しいな、どうした？」

良平「別に、ちよっと話があって…」

勇平「何だ？ いつもなら寝てるだろう」

良平「明日と明後日、函館に行くってくるから」

勇平「どうしたんだ急に？」

良平「学校で二十五年前の転校する生徒へのメ
ッセージテープを見つけたんだ、それをその
人に届けたい」

勇平「二十五年前？ …その人が函館にいるの
か？」

良平「多分。とりあえず転校先の高校に行つて
みる」

勇平「そうか…」

良平「大祐が一緒だし、貯金で函館往復と一泊
は出来るし…」

勇平「ちゃんと夜電話するんだぞ」

良平「え？」

勇平「気をつけて行って来いよ」

少しの間

JR札幌駅のアナウンス、JR走行音。

良平「あつさり函館行くの許してくれて、その
上玄関にお金まで…何を考えてると思う？
本当に気持ち悪い」

大祐「良平がわからないんじや、俺もわからな
いよ。でも良いじゃん！ うちの母さんなん
て土産買って来いって出かけにもメールで
も催促してきてるんだぞ」

良平「大祐は母さんと仲良いからな」

大祐「お互いしかいないから。良平のうちは良
くやるなく、って感心するよ」

良平「何で？」

大祐「二人しかいないのに、よくそんなに喧嘩
ばっかりしていられると思う」

良平「いつも家にいないし、あんまり話さない
し、見ててイライラしてくるんだ。昨日はき
つと機嫌が良かったんだよ…あ、俺がいない
方が楽ってことなのかも」

大祐「そんな風に言うなよ。仕事が忙しいんだ
し、仕方くない？ お金だって、心配して
くれることだろ」

良平「金で父親気取りなんて、父さんが考えそ
うなことだ」

大祐「面白いな、良平は」

良平「何だよ」

大祐「別に。あ、俺のそこは親父が女を作つて
出で行ったから、余計仲が良いのかも。良平
のそこってその辺はどうなの？」

良平「わからないんだ」

大祐「え？」

良平「母さんがいた記憶はなくて、父さんは母
さんのことをもともと居ないように扱つて
いるんだ」

大祐「何で？」

良平「さあ…小さい時に一度聞いてみたけど、
教えてくれなくてそれ以来聞いてない」

大祐「良平には知る権利あると思うけど」

良平「でも父さんは家に殆どいないし」

大祐「怖いのか？」

良平「え？」

大祐「何でもない！ 小遣いあるならイカ飯奢
つてよ」

良平「帰りにな、ていうか宿泊代とかも出すよ」

大祐「まじ？ そんなにもらったんだ」

函館駅の賑わい。

市電の通過音。

大祐「その学校って近いんでしょ？」

良平「市電の駅から直ぐだったと思う」

大祐「じゃあ、降りる時教えて」

市電の走行音。

高校教師A(50)「申し訳ないんだが、二十

五年前の生徒についてわかる者がいなくて
ね。退職した先生の住所を教えるから、そこ
に行ってもらえるかな…」

市電の走行音。

大祐「やっぱり二十五年前じゃ、学校の先生た
ちだって当時のこと知らないよな」

良平「当時の先生って何歳だろうな」

大祐「かなりの爺さんだ、きつと」

市電の走行音。

教師OB(80)「これを届けるためにわざわざ

ぎざ！ 良い子だねえ、君ら。イチゴちゃんの
ことはせつちちゃんに聞くと良い。せつちちゃん
は篠宮勢津子と言って、今は函館市場の…」

市電の走行音。

大祐「結局、スタート地点に戻っちゃうね。何
してるんだろう、俺たち」

良平「函館市場の食堂ってまだやってるよな…」

イチゴ先輩の友達が帰ったりしないよな」

大祐「観光客が多いだろうし、多分大丈夫だと
思うけど」

良平「連絡してくれるって言ってたけど、あの
先生…ほんの少し呆けてたよね」

大祐「それ俺も思った！」

市電の通過音。

函館駅前市場の賑わい。
食堂の呼び込み。

大祐「どこだっけ？」

良平「えつと…多分ここだ」

大祐「食つてこう、海鮮丼」

良平「良いけど、ここにせつちちゃん、篠宮さん
がいるか確認しないと…あ、すみません」

篠宮勢津子(43)「いらっしやいませく、ど
うぞどうぞ！ 空いてるお席にどうぞ！」

良平「あ、いや、ちよつとお伺いしたんですが、
篠宮さんという方はいらっしやいますか？」

勢津子「篠宮はわたしですけど、あら、もしか
してあなたたち？」

大祐「先生から話行っていました？」

勢津子「ええ、イチゴちゃんのことを知りたい
高校生が来るって…」

良平「伊藤良平です」

大祐「鈴木大祐です」

勢津子「お掛けなさい、とりあえず」

良平「失礼します」

勢津子「何でまたイチゴちゃんのことなんて知

りたくなつたの？」

良平「僕ら生徒会活動してまして、放送室の片
づけ中にこれを見つけたんです」

テープレコーダーの再生音、ラジオドラ
マが小さく流れる。

勢津子「あらあ、何だか懐かしい！」

大祐「これ、二十五年前では普通ですか？」

勢津子「そうねえ、わたしの高校でもこんな感
じだったわ」

良平「時代を感じます」

勢津子「聞いていて照れちゃうね」

テープ再生終了。テープレコーダーが、
がちゃんと止まる音。

勢津子「なるほど、確かにこれはイチゴちゃん
が受け取るべきだわ」

良平「僕らもそう思います」

大祐「で、イチゴ先輩はどこにいるんですか？」

勢津子「それが…イチゴちゃんは居ないの」

大祐「え？」

勢津子「どこにも」

良平「どこにもいない？」

勢津子「ええ…イチゴちゃん、札幌から高三の
夏に転校してきたでしょ。でも札幌に付き合
っていた人がいて、こっちの短大に入ったけ
ど途中でやめて、お嫁に行ったのよ。ご両親
の反対を押し切ってね、向こうで子どもも生

まれたみたいなんだけど、一度も函館に戻ってこなかったわ。子どもが生まれたって聞いてから何年もしないうちに、交通事故にあつて」

大祐「え…このテープどうしたら良いの？」

良平「参ったな、それじゃ来た意味がないじゃないか」

勢津子「実家は函館にあるし、札幌には旦那さんと子どもがいるはず。届けるならそのどちらかじゃないかしら」

良平「住所ってわかりますか？」

勢津子「家に帰れば実家のはわかるから、後で電話しても良い？」

良平「よろしくお願いします」

大祐「篠宮さん、あと一つ聞いて良いですか？」

勢津子「何？」

良平「イチゴ先輩って、どうしてイチゴって呼ばれてるんですか？」

勢津子「さあ…当時は特に珍しい感じはしなかったからねえ。見た目はびつたりよ、可愛らしくて。短い間だったけど、ちゃんと学校にも溶け込んでたし」

少しの間

携帯電話の着信音。

良平「はい、伊藤です。はい…はい…そうですね、わざわざすみません。本当にありがとうございます」

携帯電話の通話を切る音。

大祐「篠宮さん？住所わかったんだ？」

良平「うん、明日の午前中に行けることになった」

大祐「じゃあ明日、予定通りに帰れるね」

良平「だね、今日はもう寝よう」

大祐「良平、おじさんに連絡してくない？」

良平「してない」

大祐「メール位すれば？それから明日、母さんたちにお土産買おうよ」

良平「わかった、買い物は付き合う」

大祐「お前さあ…」

良平「おやすみ」

鳥のさえずり、蟬の鳴き声。
車の走り去る音。

良平「ここか」

大祐「緊張してきた…良平、落ち込んでない？」

良平「何で？」

大祐「イチゴ先輩がもういないから」

良平「正直見てみたかったけど、仕方ないよ」

インターホンを押す、返事がない。

大祐「いないのかな？」

良平「いや、いるはずなんだけど」

インターホンを押す音、人の足音が近づいてくる。ガラスと引き戸の開く音。

豊田正（75）「君らか、葉のテープを持ってきてくれたのは」

良平「はい」

豊田「よく来てくれたね」

食器棚を開け、食器を取り出す音。

豊田「昨日、務めてた頃の後輩が退職の挨拶に来てね。それでこれを置いて行った」

大祐「スナツフルス！」

豊田「洋菓子は、好きかい？」

良平「大好きです」

豊田「それは良かった、日本茶しかないが食べてくれ。わたしは甘いのは好かんだよ、妻は好きだったんだがね」

お茶を入れる音。

豊田「それで、葉のテープというのは…」

良平「これです」

テープの再生ボタンの音。

テープの音声が小さく流れる。

豊田「おお、懐かしいな…そうそう、イチゴと呼ばれていたんだ、葉は」

テープが止まる音。

豊田「いやはやこれは…自分のことのように恥ずかしい」

大祐「そうですね、わかります」

豊田「(咳払いをして)確かにこれは葉に宛てたものだね、これが学校に？」

良平「はい、放送室にレコーダーごと置きましたなしになっていました」

豊田「そうか、ありがとうございます。届けに来てくれて」

良平「聞いてしまったらもう、処分する気にはなれなかったです。それに…」

豊田「それに？」

良平「イチゴ先輩の声がとても綺麗で、会ってみたいくて」

豊田「ありがとう。葉に聞かせてやりたいよ」

大祐「とにかく、お父さんに渡すことが出来て良かったな、良平」

良平「うん」

豊田「良平？ 君は伊藤良平くんと言うのか？」

良平「はい」

豊田「人違いだったらすまんが…君のお父さんは、もしかして伊藤勇平かね？」

良平「そうですけど、どうして知ってるんですか？」

大祐「何、何急に？」

豊田「そうか…良平君、このテープは君が持っていないかい」

少しの間

JRの警笛、走行音。

大祐「あ、イカ飯二つお願いします！ 良平もいるだろ？」

良平「うん…」

大祐「本当に感謝だよ、こんな貴重な経験は出来るもんじゃない！ 世界は広い、世間は狭いつてのは本当なんだな」

良平「誰の言葉、それ？」

大祐「忘れた！ 良平、さっきから何かぐつたりしてない？」

良平「札幌に帰るの、気が重くて」

大祐「えー？ 何で気が重いのか？」

良平「父さんに何て言えば良いのか…」

大祐「おじさん？ おじさんは判ってて、良平を送り出してるでしょ」

良平「そうかな…？」

大祐「だっておじさんなら解らないわけがないじゃん。知ってたから、良平に資金援助までしたと思うんですけど」

良平「そう考えると…だんだん腹立ってきた」

大祐「腹立つのもわからなくはないけど、ちゃんと話した方が良いよ」

JRの警笛。
札幌駅のアナウンス。

少しの間

良平「ごめんな、大祐」

大祐「何もだよ」

良平「二人で話したら、本当に殴ったりしちゃうかもしれないから」

鍵を開ける音。扉を開けようとするが鍵が掛かっていて開かない。

良平「開いてる？」

鍵を開けなおし、扉を開ける音。

大祐「(小声で)おじさん、家に居るんじゃないよ」

お前のこと待ってたんだよ

良平「たがいま」

大祐「お邪魔しま〜す」

勇平「お帰り。大祐くん、いらつしやい」

大祐「お久しぶりです」

勇平「今回は本当に、ありがとうございます」

大祐「こちらこそ、良い思い出になりました！」

良平「どうして言わないんだよ」

大祐「良平…」

良平「イチゴ先輩が母さんだってこと、知ってたんだろ！？」

勇平「お前が自分で探すのも良いなと思ったんだ。本当に今まで何も言わずにいて悪かった。どう言えば良いのかわからないまま、時間が経ってしまった…」

良平「いつもだ、都合が悪くなったら、放っておけば何とかなると思ってるんだろ」

勇平「すまない、本当に」

良平「良いよ、もう」

少しの間

大祐「良平、おじさんも謝ってるんだし」

良平「ありがとうって言ってたよ、お祖父ちゃん」

勇平「そうか」

良平「お祖母ちゃんは、もういなかった」

勇平「そうか…」

良平「それから…また遊びに来いって、今度は父さんも一緒に良いって言ってた」

勇平「ははは、”でも良い”か、ありがたいなそれは」

テープが小さく流れる。

勇平「やっぱり照れるな、当時は大真面目だったんだが」

大祐「おじさんも放送局に？」

勇平「ああ、裏方でね」

テープが小さく流れる。

良平「俺、母さんのこと、少しは覚えてるのかな」

勇平「忘れるわけがないだろ」

大祐「おじさん、一つ聞いて良いですか？」

勇平「何だい？」

大祐「どうしてこのテープ、イチゴ先輩の手元に渡らなかったんですかね？」

勇平「俺はこのテープを届けるためにイチゴに会いに行ったり文通したりしてたんだ…テープを渡したら会えなくなる気がして、先延ばしにしているうちにテープの存在を忘れて、俺も卒業してしまった」

良平「ふざけんなよ！ 何でもなあなあにしやがって！」

大祐「うわ、俺、地雷踏んじやった？」

がちゃん、とテープの再生が終わる音。

(了)